世界の主要登攀2016

池　田　常　道（日本山岳会会員）

遠征登山とアルパイン・クライミング、一部ビッグウォールの記録を紹介する。クラッグのフリー・クライミングやボルダリング、コンペティションは除いた。記録の日付は、とくにことわりのない限り2016年のものを示している。

【ネパール・ヒマラヤ】

１．6,000～7,000メートル峰の初登攀

ネ政府が104座を解禁して以来、このクラスの山々を目ざす動きが活発になった。未踏の頂を狙うばかりでなく、アルパイン・クライミングの対象として登り甲斐のある壁への挑戦も、天候の落ち着く秋から冬にかけて繰り返されている。

オーストリアのハンスイェルク・アウアーとアレックス・ブリュメルは、東部ネパールのギンミゲラチュリⅡ峰（トゥインズ東峰、7,005メートル）の北壁を登った。アウアーは当初、別の地域の未踏峰6,500メートルを申請したが不許可となり、エージェントにカンチェンジュンガ山群を勧められた。遠望写真で北壁の存在を確認し、パンペマの奥、標高5,200メートル地点にBC。近くのドローモ南稜で高所順応を図り、5,900メートルで３泊してから11月８日に出発した。氷河上を６時間かけて6,000メートルまで行き、翌日1,200メートルの北壁を一気に登攀。頂稜に出て6,850メートルでビバークした翌朝頂上を往復した。登路を下ってBCに帰ったのは、その夜遅くだった。

重広恒夫隊長（68）以下10人の日本山岳会関西支部隊は、グンサからナンゴ・ラを越えたヤンマの奥にあるナンガマリに挑んだ。Ⅰ峰（6,547メートル）とⅡ峰（6,209メートル）から成る未踏峰で、故・大西保氏が確認したもの。関西支部80周年の記念事業として計画されたが、準備を進める間にⅠ峰はスイス隊に初登頂されてしまった。未踏のⅡ峰からⅠ峰に縦走する計画に変更して９月29日、タプレジュンから２週間でヤンマ上部のカルカ（4,800メートル）にBCを設けた。入山早々不調者が脱落するなどで計画は縮小、Ⅰ峰とのコルからⅡ峰の初登頂を目ざした。２つのキャンプを設けて10月17日、ようやく頂上攻撃に漕ぎつけた。早朝C2を出た隊長以下９人はルート工作しながら登り、12時57分、頂上に立った。

2015年12月、大雪山・黒岳で遭難死した谷口けいは、その２か月前に和田淳二とパンドラ（6,850メートル）に遠征した。彼女らは未踏峰と信じて東壁に挑んだのだが、パンドラは2002年10月にデンマーク隊によって南壁から登られていた。その一行はヘンリク・ハンセン以下、アラン・クリステンセン、ボー・クリステンセン、ヤン・マトルネの４人で、パンドラを南壁から、ダンガ（6,238メートル）も南壁からそれぞれ初登頂した。彼らの報告は『AAJ2003』に掲載されている。

ロルワーリン・ヒマールでは、スペイン隊がドゥドクンド氷河で活動した。オリオル・バロ、ロヘル・カララチ、サンティ・パドロスの３人で10月中旬、山群南部に入り、4,600メートルにBCを置いた。源頭を取り巻く３つのピーク――ヌンブール（6,959メートル）、カータン（6,853メートル）、カリョルン（6,511

メートル）を偵察後、まず29日から31日、カリョルンの南南西稜をビバーク2回で初登攀。北稜を経てBCに帰った。標高差1,400メートル、6a、AI4、M4のルートをドゥドクンダ・ピラーと名付けた。続いてバロとパドロスがヌンブールに向かい、11月４日午前４時、南壁に取付いた。キャンプから1,100メートル上の頂上まで一気に登る算段だったが午後２時過ぎ、6,900メートル付近で悪い雪面に遭遇、そこから引き返した。到達点までの1,000メートルにはネパーリ・サンと命名した。

花谷泰広隊長のヒマラヤ・キャンプ第２回はBCマネージャー１人を含む７人。ロルワーリン・カン（6,664メートル）を目ざし、隊長以下登攀メンバー６人で初登頂に成功した。１年前の第１回でランダックなどに登ったおりによく観察していた山で、最初から、この未踏峰に登ると宣言してメンバーを集めた。10月７日BCに入り、11日から３泊４日の高所順応。目標とした6,000メートルには届かなかったが、BCで２日間休養して頂上攻撃。17日に、順応時に設けたC1（5,550メートル）まで上がり、18日にC2（6,100メートル）。19日に頂上を往復した。

アメリカのニック・ミルハシェミとマーク・プグリースは、初めてのヒマラヤ行で３つのルートを登った。山麓の集落ナを出て、ポピュラーなトレッキング・ピークであるヤルン・リ（5,647メートル）のBC（4,800メートル）で１泊した10月23日、北面に取付いて南面へと迂回する新ルートから頂上に立ったが、これはヤルン・リではなくひとつ北にあるノルブ・ピーク（5,634メートル）だった。彼らはルートをWrong Way Bud（500m、5.6、M4）と名付けた。

ナに下りて２日間休養後チュギマゴ北峰（5,945メートル）の西壁基部にキャンプ。10月28日に北西壁から北稜を登ったが、頂上まで100メートルを残して雪庇の稜線に阻まれた。そこまでのルート名はWitness the Sickness（500m、M4,AI4）。再びナに下りて休養を取り、今度はチュギマゴ主峰（6,258メートル）の西壁下に泊って11月１日、2014年スロヴェニア・ルートの右手を登った。下部は傾斜70度の万年雪、左へトラバースして約300メートルのヘッドウォールを登ると北稜に飛び出し、6,100メートルでビバーク。翌日稜線伝いに頂上に立った。ルート名はMixed Emotions（900メートル、M6、AI5）。

西ネパールではイギリスのベッキー・コールズとサイモン・ヴァースピークが、地図上に6,246メートルと記されている無名峰に初登頂した。前年10月に近くのガヴェ・ディン（6,400メートル）を登ったミック・ファウラーが写真を提供してくれた山である。初め北稜を試みたが、雪が少ないのに加えて強風にさらされるため断念、幾分やさしそうな東稜に切り替えた。モレーンの縁でキャンプ跡を見つけたのでもう登られていたかとがっかりしたが、その隊が設置した固定ロープは5,200メートル付近で途切れており、そこから先になんの痕跡もなかった。安堵した２人は11月11日に頂上を陥れた。

２．その他のおもな再登・試登

韓国のキム・チャンホ、チェ・ソクムン、パク・ジョンヨンが秋に南壁をバリエーションから登った。1981年にカナダのジョン・ロークランとジェームズ・ブレンクが初登攀した壁で、カナダ・ペアは取付のベルクシュルントまではカプセル・スタイル、そこから先はアルパイン・スタイルで登った。韓国トリオは下部氷壁をは同じラインから入り、上部ロックバンドからヘッドウォールはその右にルートを採って、７日間のアルパイン・スタイルで完登、下降には３日間を要した。一行はガンガプルナの西峰であるアジャプルナ（7,140メートル）南壁も試みたが、こちらは頂上まで100メートルを残して断念した。

アンナプルナⅢ峰（7,555メートル）では、オーストリアのハンスイェルク・アウアー、アレックス・ブリュメル、ダーフィット・ラマが春に南東バットレスを試みた。1981年秋にイギリスのニック・コルトン、ティム・リーチ、スティーブ・ベルが手を付けた古い課題で、アルパイン・スタイルで３分の２を登り、6,500メートルまで達している。その後何度か挑戦されたが、アプローチの困難さと2,300メートルのスケールが今日まで登攀を妨げてきた。

今回のトリオは4,700メートルに置いたBCから5,900メートルの肩まで１日で登ったが、翌日のミックス部では寒気と強風にさいなまれ、雪まで降り出した。6,400メートルでビバークした翌日はなんとか150メートルを稼いだものの、登頂のチャンスはないとみて断念、下降した。

山野井泰史、古畑隆明、遠山学はゴーキョの奥にあるアビ（6,089メートル）北壁を試みた。2014年にチェコ隊が北壁を試登したが、まだ登られていない。順応と偵察を終えた10月30日に、ゴーキョから６時間かけて北壁基部（5,000メートル）に至り、翌日チェコ隊とほぼ同じラインを登り始めた。壁には雪が少なく、部分的に脆い岩が出ていた。5,800メートルに予定したビバーク地を目ざすが12時間登っても届かず、疲労もかさんできたので5,650メートルで断念、下降した。

３．8,000メートル峰の動向

エヴェレスト（8,848メートル）では、ルート工作チームの頂上到着が、ネパール側で５月11日、チベット側で19日と出遅れたものの、最終的に南北合わせて641人が登頂した。ネパール側は雪崩事故や大地震で２年間登山が行われなかったので、３年ぶりの成功だった。大半が通常ルートに向かうなか、今季唯一のバリエーション、南西壁を目ざしたスロヴァキアのウラディーミル・ストルバとゾルタン・パリは7200m地点で雪崩に遭って断念した。

マカルー（8,485メートル）では30人以上が頂上に立った。一番乗りは５月12日に登ったロマーノ・ベネト、ニヴェス・メロワのイタリア人夫妻で、２人とって13座目の8,000メートル峰。14座完登までアンナプルナⅠ峰（8,091メートル）を残すばかりとなった。22日に登ったボーヤン・ペトロフ（ブルガリア）は４月30日のアンナプルナに続く１シーズン２座目の登頂だった。

マナスル（8,163メートル）は日本隊の初登頂から60周年のシーズン。スロヴァキアのペーター・ハモルとルーマニアのホリア・コリバサヌが北稜を目ざしたが断念、５月10日に通常ルートから登頂するにとどまった。秋には公募隊を主体に16隊148人が殺到、なかには中国人クライアント60人にシェルパ100人というマンモス登山隊もあった。９月29日には一挙に150人が頂上に立っている。スペインのアルベルト・セラインとアルゼンチンのマリアーノ・ガルバンは、2006年にカザフ・ペアが登った北東壁直登ルートの左を狙ったが断念、通常ルートに回って頂上に立った。高野優隊長（31）の東京農大隊は東稜からプラトー下をトラバースする85年オーストリア・ルートに向かった。10月６日、全員無酸素で頂上に向かうが、7,650メートル付近で断念。翌日、隊長と小野寺央峻が非常用酸素各１本を使って再度攻撃して登頂したが、小野寺隊員が滑落、行方不明になった。

アンナプルナⅠ峰では春に30人がダッチ・リブから登頂。このなかには77歳のスペイン人カルロス・ソリアも含まれていた。彼は引き続いて13座目となるダウラギリⅠ峰（8,167メートル）にも挑んだが失敗、14座まで２座を残した。

【中　国】

１．四川省・ゲニ山群

ジェームズ・モニペニー（英）以下アイルランド、ニュージーランド、アメリカ、イタリアの混成チーム７人が９月～10月にゲニ周辺で活動した。目標は主峰（6,204メートル）の北方にある二つの未踏峰で、嘎木内沟の4,200メートルにBCを置き、まず5,863メートル峰（Hutsa）東壁に向かった。二つのペアが異なるルートを攻撃したが、順応不足でどちらもパートナーが脱落。モニペニーとロバート・バートリッジ（ニュージーランド）がルートを変えて、直接頂上に続くランペを、ABCから往復17時間で登った。９月も末になるとモンスーンも明け、メンバーの順応も進んだので所期の目標に戻り、モニペニーがピーター・リニー（アイルランド）と「隠れたクーロワール」（WI6、M6）を30時間で往復した。この間、イタリアのルカ・ヴァッラータとティト・アロジオはこのピークの南東にある5,912メートル峰西壁を攻め、９月30日～10月２日に初登頂した。

滞在期限の切れた４人が下山し、残った４人は、2006年にデイブ・アンダーソン（米）がサラ・ヒュニケンと登ったサチュン（5,716メートル）南稜に向かった。アンダーソンの写真にあった、見事なクラックの入った岩壁に興味をひかれたのである。こちらは、モニペニーとヘザー・スウィフト（米）が第２登を果たした。

サチュンから北西へ谷ひとつ隔てたところに5,625メートルピークがある。資料によって5,851とも5,346メートルとも記されている未踏峰でXialong Rezhaの名がある。オーストラリアのエド・ハナム、ミッチ・マレー、ロブ・ベイカーが10月下旬から15日間続いた好天を利用して挑んだ。川蔵公路から5,000メートルの峠を越え、成都から４日間で西面の4,200メートルにBC。ここで３晩を過ごしてから4,900メートルにBCを移動した。西壁中央のクーロワールをたどり、5,350メートル付近から左へトラバース、稜線直下に出た。ところが、スラブに積もった雪は墜落を止めるすべもないほど悪く、頂上部分の攻略は諦めて下降に移った。ここまで650メートル12ピッチ、スコットランド・グレードでⅥ、M4だった。往路を下ってBCに帰ったのは夜の10時だった。

２．チベット自治区

平出和也（37）と中島健郎（31）が９月、ルンポ・カンリ（7,095メートル）を新ルートの北壁から第２登した。カンティセ（崗底斯）山脈に属するこの山は1994年春に、日本ヒマラヤ協会隊（八嶋寛隊長）が北東稜から試みて6,340メートルで敗退。２年後の秋に中韓合同隊（コウ・ヨンチュル隊長）が同じルートから初登頂していた。

今回のペアは９月７日に日本を発って13日、北面氷河湖の下流１キロの地点にBC（5,280メートル）を建設。19日までの１週間を順応と偵察に充て、20～21日の２日間で北壁を初登攀した。１日目は6,780メートルでビバークし、翌日頂上に立って北東稜を下り、その日のうちにBCに帰った。翌日にはBCを撤収・下山、10日間で終えた。

東西に長いニェンチンタングラ（念青唐古拉）山脈の西部は、他の地域に先駆けて1980年代からいくつかのピークが登られてきたが、ナム・ツォに面した北面の壁は手付かずで残っていた。イギリスのニック・ブロックとポール・ラムズデンは初めて山脈の北側に入り、南東峰（7,046メートル）北壁を登った。中村保氏の撮った山脈北面のパノラマ写真を見たラムズデンは主峰（7,162メートル）から西へ立ち並ぶ４つの7,000メートル峰のいずれかの北壁を計画。いざ現地で見るとほとんど雪壁で、手ごたえありそうなのは南東峰に突き上げる岩交じりのバットレスだっ

た。取付は5,400メートル、標高差は1,600メートルある。

最初の攻撃は悪天候で中断、10月２日に改めて出発した。急峻なバットレスは岩が露出しているが、中央部には氷雪が断続していた。しかし、それもVスレッドを作れる厚みはなく、岩にアンカーを取るほどのギアも持ち合わせないペアにとって、懸垂下降するのは厄介なことになりそうだった。３日目からは雪崩の危険を避けてバットレスの稜線をたどったが４日目の夜から降雪となり、翌日頂上に立ったときは視界がなかった。下降路は東稜に採り、途中から北側の谷を下っていくと草地が広がり、飛び出した小さな集落は、偶然にもリエゾン・オフィサーの出身地だった。

ニェンチンタングラ西部では９月中旬、ジャンツァン・ゴウ（6,300メートル）も登られた。スロヴェニアのドメン・カステリッチ（34）とスウェーデンのオーロフ・イサクソン、マルクス・バルムは四川省の四姑娘山塊で順応を図ったが、天候不順で5,000メートル以上には登れなかった。成都へ戻ってラサへ飛び、スゲラ峠を越えてアプローチ、5,000メートル地点にBCを設けた。対岸の5,800メートル峰に登り、目標の偵察も済ませたが、天候悪化のため９月17日まで待機を余儀なくされた。ジャンツァン・ゴウは北東壁に向かい、BCから４時間の氷河上にABCを出した。翌９月19日、12時間登って頂上直下まで達したが、残りの距離が不明なのでいったんビバーク、翌朝になってから頂上に立った。おそらく初登頂と思われる。

なお、カステリッチは帰国後の10月29日、イタリアのダニエーレ・コロンボとモン・ブランのモンツィーノ小屋を出たまま消息を絶ち、11月３日、２人とも雪崩に埋められ、遺体で発見された。

３．8,000メートル峰

エヴェレスト（8,848メートル）のチベット側からは春シーズン、10人ほどが無酸素登頂を宣言していたが成功したのはエクアドル女性のカルラ・ペレス、アメリカ女性のメリッサ・アルノー、同じくアメリカのデイヴィッド・レースキとコリー・リチャーズの5人だけだった。ペレスとアルノーは、女性として７、８番目の成功である。また、ドイツのトーマス・レームレは無酸素登頂したが、帰途C3（8300m）で酸素を使った。メキシコのホルヘ・サラサールとホルヘ・エルモシージョは、頂上の帰りに倒れた仲間のために無酸素登頂を諦めて救助に専念した。

シシャパンマ（8,027メートル）では、春に南西壁の新ルートを狙ったウエリ・シュテック（スイス）とダーフィット・ゲトラー（ドイツ）が7,600メートルで断念した。２人は順応行動中、1999年に雪崩で行方不明になったアレックス・ロウとデイヴィッド・ブリッジズの遺体を発見した。

【インド・ヒマラヤ】

１．ウッタラカンド（ガルワール）

ロシアのドミトリー・ゴロフチェンコ、ドミトリー・グリゴーリエフ、セルゲイ・ニロフがテレイ・サガール（6,904メートル）北壁に新ルートを拓いた。中央クーロワールと北東稜の間にある高さ1,200メートルのロック・ピラーをたどるもので、９月９日に取付いて17日頂上に抜けた。下降路は1979年の初登頂ルート（英米隊の北西稜）に採り、19日にBCまで帰った。ルート名はMoveable Feast（5c、WI5, M7）。

登攀は、ロシア流のビッグウォール方式ではなくワンプッシュで行なわれ、ビバークにはポータレッジすら使われなかった。「そのこと自体も挑戦のひとつだった」という。ゴロフチェンコとニロフは2012

年にカラコルムのムスターグ・タワー（7,284メートル）東壁を登ってピオレドールを受賞している。

パーヴェル・カルチマルチク隊長のポーランド隊は、次世代ヒマラヤン・クライマー養成計画の一環として秋にシブリン（6,543メートル）に挑んだ。ルーカシュ・フルザノフスキとグシェゴシ・ククロフスキは北壁を登ったものの、頂上まで250メートルに迫ったところで後者が動けなくなり、ビバークした翌日に死亡。残されたフルザノフスキも単身下降する途中に200メートル滑落して亡くなった。

シャモニをベースに活動する４か国のクライマーが合同し、初めてヒマラヤに遠征した。５月１日ナンダンヴァンにBCを置いた一行は二手に分かれ、コッラード・ペシェ（イタリア）、マルティン・エリアス（スペイン）、ダミヤン・トマジ、セバスチャン・コレ（以上フランス）の男性軍はバギラティⅢ峰（6,454メートル）南西壁左ピラー（1984年カタルニア・ピラー、1,300メートル、Ⅵ+、A3）を、ファニー・トマジ＝シュミュッツ（フランス）とエロディ・ル・コント（フランス）の女性軍は南西壁のスコットランド・ピラー（1982年、1,300メートル、Ⅵ、A2）をそれぞれ試みた。両ルートとも初登時はカプセル・スタイルで登られたが、その後アルパイン・スタイルで登るのが常識になっている。男性軍は５日間で登って５月13日頂上に立ち、84年秋にカナダ・ペアが記録した最速記録を更新、女性軍16日に取付いて22日に完登した。

２．ヒマチャール・プラデシュ

ガングスタン（6,162メートル）は、1945年にイタリア隊が初登頂した南西稜が通常ルートとなって久しいが、2007年のイギリス隊（マーティン・モラン隊長）は西面から取付いて南西稜の5,850メートル地点に抜けるバリエーションを登った。このときモランが撮った写真に写っていた北西稜に興味を抱いたマルカム・バス（イギリス）は、ガイ・バッキンガムを伴って６月に挑戦、初登攀に成功した。

手はじめに北西稜上部にある岩峰ニールカンタ（5,324メートル）に登って順応。この山は、かつてティロット・シブリンと呼ばれていたものである。２日間休養してから、５日分の物資を携えて北西稜に取付いた。北壁下の氷河上約5,000メートルでビバークし、翌朝北西稜に通じるクーロワールを登る。稜線に出ると岩質はよくなり、ドライツーリングを交えて快適な登攀。２回のビバークで6,000メートルに近づくと灰色の硬い氷が出てきて、天候も悪化してきた。寒気がきついため頂上には長居せず、南西稜を100メートルほど下って最後のビバーク。天候が回復した翌朝、モランのたどったバリエーションを下って氷河に下りた。標高差1,500メートルのルートはED+、スコットランド・グレードⅥのミックスで、岩壁部は5cまでだった。

ミヤール谷では、マーティン・モランら４人のイギリス隊が９月に入山、二つのペアに分かれて活動した。デイブ・シャープとジョン・クルックはミヤール氷河にABCを置き、27日にそこを出てカン・ラ（5,450メートル）を越えた。テマサ谷に入って、ラジャ・ピーク（6,257メートル）に北壁から初登頂した。頂上に立ったのは10月１日。ABCに帰ったのは翌日で、往復には６日間を要した。ルート名はTranscendence（1,200メートル、ED2、スコットランド・グレードⅥ）。

その後まだ日数が残っていたので下流のジャングバール氷河に入り、5,780メートルの無名峰にも初登頂した。ルート名はLast Chance Saloon（1,300メートル、TD−、スコットランド・グレードⅣ）、山名はシャープの甥の名を採ってジェームズ・ピークとした。モランとイアン・ドリングは別の無名峰に向

かい、ラスト・チャンス……の右にある岩稜から初登頂、マラクラ・キラと命名した。またルートにはその形状からクロコダイル・ロック（1,300メートル、ED2、スコットランド・グレードⅥ＋）と名付けた。

1987年にスパンティーク（7,028メートル）のゴールデン・ピラーを登ったミック・ファウラーとヴィクター・サンダーズ（イギリス）が29年ぶりにコンビを復活、パンギ谷のセルサンク（シブ・シャンカール、6,095メートル）北壁を登った。９月28日、BCからセルサンク・ラを越えて北面に入り、北バットレスをルートに選んだ。北壁基部でビバークした翌日から登攀を開始。バットレス下部を２日間登ってから右手の氷壁に移り、３日間で稜線、頂上に出たのは７日目のことだった。下降路は南西稜に採り、８日目にBCに帰った。

南西稜は2009年に労山マスターズ隊（坂本昌士隊長）によって登られたが、彼らは頂上ドームを登っていない。同行した高所ポーターの「聖なる頂は踏まない」という助言にしたがって、その基部（GPS高度6,011メートル）で引き返したのである。これが初登頂として扱われ、高度は引き返し点のそれを採用して流布されている。ファウラーの調査ではそのような戒律はないということなので、今回が初登頂と訂正する必要があろう。

２．ジャンム・カシミール

キシュトワール・シブリン（6,040メートル）は、1983年にイギリスのディック・レンショウとスティーブン・ヴェナブルズによって北壁から初登頂された。イタリアのニコラ・ピネッリ、ルカ・コルネッラ、シルヴェストロとトマスのフランキーニ兄弟は６月に東稜を初登攀した。５月22日、１週間のアプローチでブジワス谷のBCに着いた４人はさっそく攻撃に取りかかったが、剥がれ落ちたフレークで２本のロープを切断されるという危うい目に遭った。態勢を立て直して次の攻撃は６月８日。今度はビバーク１回、正味登攀時間22時間で完登、ルートをVia dei Trentino（800メートル）と命名した。

アメリカのクリス・ギビッシュとジェフ・シャピロは秋に、ブラマー山群の最高峰Ⅱ峰（6,425メートル）を南から試みた。この山は1975年に札幌山岳会隊（計良幸作隊長）が北面から初登頂したものだった。キジャイ・ナラに入ってみると気温が高いため手前の岩壁にはほとんど氷雪が見られない。結局、最奥部のブラマーⅡ峰を目標とし、BCから２日間で南壁の基部に至った。

想定したラインは落石や雪崩の危険がありそうなので、その左手にルートを採る。南壁下部に朝日が差す前に危険地帯を抜けようと午前３時に登攀開始、午後６時過ぎ頂上に達した。５回の懸垂下降でヘッドウォールを下り、その下の氷壁に出たところでビバーク。翌朝も早めに行動を起こし、壁の上部に日が当たる前に安全地帯まで下降した。ルート名はPneuma（1,300メートル、AI4,M5）。

このほかキシュトワールでは、ジェームズ・スミスウィックらの米＝仏＝スウェーデン隊がハグシュ（6,515メートル）に挑んだが、失敗に終わっている。また、デレック・バックルらのイギリス＝ノルウェイ隊が無名峰6,222メートルと6,315メートルに登っている。

ザンスカールでは、コスミン・アンドロン隊長以下のルーマニア隊が７月にT16（6,431メートル）北峰に初登頂した。６月６日パダムからチョゴ・トクポに着き、翌日そこから12キロの地点（4,200メートル）にBCを設営。順応と偵察を兼ねてT13（6,436メートル）西稜の5,900メートルまで往復するが、その先は難しそうなのでT13を断念、T16の南面に見つけたダイレクトなクーロワールに変更した。5,200メート

ルにABCを設け、隊長とクリスティナが17日、落石の雨をかいくぐってクーロワールを登り、翌日南峰頂上に達した。なお、T16には北峰と南峰があり、両者を結ぶ稜線にも大小の岩峰がある。

【パキスタン】

１．ナンガ・パルバット冬季初登頂

K2と並んで冬季未踏で残っていたナンガ・パルバット（8,126メートル）がついに登られた。スペインのアレハンドロ・チコン、パキスタンのアリ・サドパラ、イタリアのシモーネ・モーロが２月26日に登頂したもので、いずれも一度ならず冬のナンガに挑戦してきた経験者だった。

1988/89年のポーランド隊（マチェイ・ベルベカ隊長）が冬季挑戦の口火を切ってから27年、20以上の隊が挑んで果たさなかった。とりわけここ数年は毎年複数の隊が挑戦したが、1997年ポーランド隊のクシストフ・パンキェヴィッチ隊長とズビグニェフ・トゥシュミエフが記録した到達点7,850メートルを超えることはなかった。前年３月には、今回登頂したチコンとサドパラがイタリアのダニエーレ・ナルディと３人でほぼ同じ高さまで迫ったものの、サドパラの不調で引き返していた。今季入山したのはルパル側に２隊、ディアミール側に４隊である。

ポーランドのマレク・クロノフスキは2011年と14年に同僚のトマシュ・マツキェヴィッチと挑んだが、今回は独自に「ナンガ・ドリーム」隊９人を編成して、ルパル側から1976年に登られた南西稜に向かった。１月22日にマゼノ・ギャップに達し、7,300メートルまで進んだものの、天候悪化に追い返された。この隊のルート工作が終わるころを見計らったように１月末、やってきたのは米国籍のブラジル女性クレオ・ワイドリッチ（クレオ・パチェコ）だった。8,000メートル峰コレクターとして知られる52歳は３人のシェルパを伴って南西稜を目ざしたものの、そのうち２人が早々と脱落。クロノフスキ隊も撤収したため、登山活動に移ることなく帰国する羽目になった。

ディアミール側ではマツキェヴィッチがフランス女性エリザベート・ルヴォルと、前年7,800メートルで敗退に終わった北峰Ｉ西壁経由のルートに挑んだ。今回はパキスタンからアルスラン・アハメドを加えたが、体調を崩したためマツキェヴィッチとルヴォルだけで攻撃、１月22日に7,400メートルに達したところで断念した。ルヴォルはこれで帰国することに決めたため、BCに残ったマツキェヴィッチは再度の攻撃を試みることもできずに終わった。一方、すでにマカルー（8,485メートル）など３座の冬季初登頂記録を持つイタリアのシモーネ・モーロも、前年と同じく女性クライマーのタマラ・ルンガーを伴って北峰Ｉ西壁を目ざしていたが、雪の状態が悪く、雪崩の危険が高いため登りあぐねていったんBCに戻った。

残る２隊は、いずれも1962年に登られた本峰西壁ルートに向かった。前年惜しいところで涙を呑んだチコン、ナルディ、サドパラのトリオと新顔のポーランドペア、アダム・ビエレツキとヤーツェク・チェフである。夏は通常ルートとして利用されてきたこのルートだが、冬は下部岩壁が氷化してルート工作が必要になるため、小人数チームは敬遠する傾向にあった。南西稜や北峰Ｉ西壁、ママリー・リブ、1978年メスナーの西壁などさまざまなラインが試みられた末、前年のチコンら３人が7,850メートルまで迫ったことでこの通常ルートが最も可能性が高いものとして見直された。

これまでにガッシャブルムＩ峰（8,080メートル）とブロード・ピーク（8,051メートル）に登って冬季２座を手にしているビエレツキは、チェフと共にチ

コンと協力してC3までのルート工作と荷揚げを繰り返した。しかし、C2（5,800メートル）へ荷揚げして帰る途中に転落・負傷し、そのまま断念を余儀なくされた。

チコンとサドパラは１月中に何度かBC（4,000メートル）を発して頂上攻撃を試みたが、雪崩の危険に阻まれて失敗に終わっていた。滞在が１か月を超えた２月に入ってからチコンとナルディが分裂。後者が帰国を決めた後、分担金の支払いをめぐってもめ、非難の応酬に発展した。

北峰Ｉ西壁をC2で諦めたモーロとルンガーは、ナルディを失ったチコンとサドパラに合流することにした。４人は、ルートを確保するために、２月なかばまでに数回上部への行動を起こしたが、断続的に悪天候が襲い、強風のためC1（4,800メートル）から先へ進むことはできなかった。両チームとも十分な高所順応を得る機会が得られないでいるうちに、下旬には好天が訪れるという予報がもたらされた。チコンとサドパラが6,800メートルで泊まったのは１か月前だったし、モーロとルンガーはそこまでも達していなかったが、この機会を逃す手はないとBCを出て攻撃に移った。

２月22日、まだ強風の吹くなかC2への固定ロープをたどって一気に2,000メートルを登った。強風は翌日も吹き止まず、C2で１日停滞を余儀なくされた。23日未明になってようやく風が落ち、C3（6,700メートル）に入ることができた。翌日はバツィンシャルテ下の7,100メートル地点にＣ4を建設。26日の朝６時に頂上へ向けて出発した。頂上ピラミッドでは、チコン以下３人が直接最高点に通じるクーロワールを採る一方、サドパラは右手の岩場をたどるルートを選んだ。前夜から不調で眠れなかったルンガーは頂上まで100メートル以内までがんばったが力尽き、他の３人が順次頂上を踏んだ。モーロにとって４座目、チコンとサドパラにとっては初めての冬季8,000メートル峰となった。凱歌を挙げた一行は長居することなく下降に移り、出発以来14時間後、ルンガーと共に無事Ｃ4に帰着。翌日一気にBCまで下った。

成功した要因は、なんといっても、通常ルートを見直したことであろう。先述したように、最近の小人数チームはルート工作を必要としないルートをさまざま試みてきた。しかし、南西稜にせよ北峰Ｉ西壁にせよ、距離が長くなる分冬には余計難しくなる。固定ロープを張ることを厭わず、なるべくダイレクトに登るメリットは前年のチコン、ナルディ、サドパラによって証明された。

また、サドパラの存在も大きかった。彼はこれまでに20回登山隊に参加し、そのうち５回はブロード・ピークなどの冬季遠征だった。パキスタンの8,000メートル峰５座すべてに登っており、ナンガの頂も２回踏んでいた。今回のメンバーのうち彼だけが上部の様子を知悉していたことは、成功の重要な要素たった。

２．夏の8,000メートル峰

K2（8,611メートル）にはドリーマーズ・デスティネーション（ネパール）、コプラー・アンド・パートナー（スイス）といった有力公募隊とそれらに属さない登山者70人以上が７月10日、一斉に攻撃をかけた。しかし、期待した好天は続かず、14日朝から強風が吹きだしたためC3（7,300メートル）から撃退された。その後、シェルパとパキスタン高所ポーターから成る12人の先遣隊が７月末C3に上がったが、状況が思わしくないため、相談しようといったん引き返した。案の定、その夜雪崩がキャンプを襲い、デポした酸素ボンベのすべて（20万ドル相当）やテントなどの装備を流し去ってしまった。先遣隊が下山しなければ数十人規模の登山者がC3に泊まることに

なっていただけに、大惨事をまぬがれたことになる。人的被害はなかったものの、ガッシャブルムⅠ峰への変更を決めたドリーマーズ・デスティネーション隊以外は今季の挑戦を諦めた。

ブロード・ピーク（8,051メートル）ではスロヴェニアのアレシュ・チェセンとルカ・リンディッチが今季唯一の登頂を記録した。２人は、ガッシャブルムⅣ峰（7,925メートル）に挑む準備として登山許可を得たうえで、西稜通常ルートを登った。６月15日に入国して29日にBCに到着。１回目の順応は5,700メートル、２回目は7,000メートルで泊まった後、７月12日に頂上を往復した。

ガッシャブルムⅣ峰では北西稜を登ったが、北峰（7,900メートル）で終わった。もともとは、西壁右手の新ルートを狙っていたが、コンディションの悪さを見て北西稜に変更したもの。７月23日にガッシャブルムBCを出てアルパイン・スタイルで登り、北峰頂上に立ったのは26日。しかし、２日半保った天候が悪化したため頂上まで行かずに引き返した。

北西稜は1986年にティム・マッカートニー＝スネイプ、グレッグ・チャイルド、トム・ハーギスのオーストラリア＝アメリカ隊が初登攀したものだが、その前年に西壁から北峰に抜けたヴォイチェフ・クルティカ（ポーランド）とロベルト・シャウアー（オーストリア）が下降路に使った。第２登は99年韓国隊のカン・ヨンリョンとユン・チウォン。2008年のスペイン隊（アルベルト・イニュラテギら５人）は北峰と頂上の中間ピークまでで引き返していた。

K2に向けての順応登山としてブロード・ピークを併願した公募隊を含む他のチームは、いずれも深い雪に行き悩み、中央峰とのコル（7,800メートル）かその手前から敗退した。14座目の登頂を目ざしたスペインのオスカル・カディアチは８月１日に最後の攻撃をかけたものの、7,300メートルまでしか行けずに終わった。

フランスのアントワーヌ・ジラールは７月23日、パラグライダーで頂上を越える飛行に成功した。トランゴ・タワーを飛び越えてコンコルディア上空に達したジラールは、西面の上昇気流をとらえて8,157メートルまで上がった。指先が凍傷になりかけたので下降に移ったが、8,300メートルまで上昇することは可能だったと語っている。所要７時間のフライトだった。ジラールはパキスタンの山岳地帯を、ビバークを繰り返しながら単独飛行。ブロード・ピークは、19日間260キロにわたる旅の一環だった。

ガッシャブルムⅠ峰（8,080メートル）では、K2を諦めたドリーマーズ・デスティネーション隊がこちらに目標を変え、８月８日に８人を頂上に送った。Ⅱ峰との継続を狙ったスペイン隊（アルベルト・イニュラテギ隊長）、ポーランド隊（ヤーツェク・ガウリシャク隊長）も断念した。

チェコのマレク・ホレチェクは過去３回さまざまなパートナーと挑んで失敗してきた南西壁新ルートを目ざして７月25日までに、通常ルートの7,500メートルを往復した。南西壁は、1983年のヴォイチェフ・クルティカとイェジ・ククチカ（ポーランド）が最終部分で南西稜へ抜けて初登攀、2002年のワレリー・ババノフとヴィクトル・アファナシエフ（ロシア）が西稜へとエスケープして第２登した。ホレチェクはダイレクト・ルートに固執してきたが、2013年の挑戦では僚友ズデニェク・フルビーを失っている。

今回のパートナーはチェコのオンドラ・マンドゥラで、もともとガッシャブルムⅣ峰西壁を狙っていたが、パートナーが不調に陥ったためホレチェクに合流したもの。２人は８月９日にBCを出て最後の攻撃をかけた。この日6,000メートルでビバークした翌日、降雪と雪崩のなかを6,800メートルまで登ったが、

３日目は停滞、４日目には200メートルを稼ぐにとどまった。

ナンガ・パルバットには、パキスタン・タリバン運動のテロで11人が死亡して以来途絶えていた夏季の登山隊が３年ぶりに戻ってきた。６隊19人がディアミール側に入山し、１隊を除いて西壁通常ルートに向かった。

フランスのヤニック・グラジアーニ、エリアス・ミレルー、スペインのフェラン・ラトーレは北峰Ⅰ西壁を経由するルートを目ざした。頂上まで抜けた隊はまだないが、前年冬に7,800メートルまで登られている。３人は７月７日にBCを出て３泊、7,400メートルで最後のビバークをした。翌11日に頂上に向かったが、予期せぬ強風に見舞われたため7,800メートル地点から引き返した。

13座目登頂を狙うラトーレは諦めきれず、ミレルーと２人で通常ルートに移って再度登頂を狙った。こちら側では下部岩壁（キンスホーファーウォール）に通じるガリーが氷化してルート工作が遅れていた。ブルガリアのボーヤン・ペトロフとイワン・トモフは７月14日に頂上を攻撃したが、バツィン盆地から頂上ピラミッドに抜けるガリーを見つけられずに敗退した。春にネパールのアンナプルナとマカルーに登っていたペトロフは14座登頂へ向けて執念を見せ、ラトーレとミレルーに加わって再度攻撃、７月26日にC4（7,200メートル）から頂上を往復した。これが今季唯一の登頂で、春のアンナプルナに続いて14座完登を目ざしたキム・ミゴンの韓国隊など４隊は得るところなく撤収しなければならなかった。

３．チョクトイ氷河の岩峰群

バインター・ブラック（オーガ）とラトックの山群は1970年代にビアフォ氷河側から登られたが、チョクトイ氷河側からはただ１回（バインター・ブラック南壁、2012年）しか登られていない。ラトックⅠ峰（7,108メートル）北稜が1978年にカプセル・スタイルで頂上直下まで迫られた以外はすべて失敗していた。韓国隊が西側から固定ロープを用いて初登頂したオーガⅡ峰（6,980メートル）もそのひとつである。

アメリカのカイル・デンプスターは、2013年以降毎年、その北壁を執拗に狙ってきた。15年にはスコット・アダムソンと組んで挑み6,600メートルを超える地点まで迫ったが、アダムソンが転落して負傷、敗退した。２人は再挑戦を期して８月21日早朝から５日間の予定で登攀を開始した。翌日夕方、BCのコックがルートのなかほどを行く２つのヘッドランプを認めたが、それを最後に消息は失われた。頂上からビアフォ側へ下った可能性もあると、アスコーレのポーターが派遣されたが、２人は下りてこなかった。近くのラトックⅠ峰に挑んでいたトーマス・フーバー（独）もパキスタン陸軍のヘリに搭乗して捜索に加わったが、手がかりは得られなかった。

【ヨーロッパ】

１．アルプス６大北壁冬季ソロ

６大北壁とは、故ガストン・レビュファが著書『星と嵐』に取り上げた３大北壁（アイガー、グランド・ジョラス、マッターボルン）にドリュ、ピッツォ・バディレ、チマ・グランデの３つを加えたものだ。いずれもクラシックだが、これを冬の１シーズンに単独で登った例はまだなかった。イギリスのトム・バラード（26）は、2015年12月21日から挑戦を始め、３月19日までの3ヶ月以内に６つの北壁を完登した。その内訳は12月21～22日にチマ・グランデ、１月６～７日にピッツォ・バディレ、２月10日にマッターホルン、３月８日にグランド・ジョラス、14日にドリュ、19日にアイガー北壁だった。

２．モン・ブラン山群

５月８日、クールマイユールのガイド、ルカ・ロッリとフランチェスコ・チヴラ・ダーノがブレンヴァ・フェースのマジョール・ルートをスキー滑降した。1979年９月にステファーノ・ベネデッティが初滑降してからじつに37年ぶりの成功である。前日真夜中にフルシュのコルを出た２人は９時間かけて頂上に到達。途中、休む間もなく一気に滑降に成功したという。

グランド・ジョラス南南東壁（トロンシー・ウォール）では７月28日～30日、イギリスのサイモン・リチャードソンとドイツのミヒャエル・リンが、10年以上前から目がつけられていたラインを登った。この一帯は、モン・ブラン山群のなかでも訪れるクライマーが少なく、野性味を残したエリアである。ルートはダイヤモンド・リッジ（1,600メートル、5c、A0）と名付けられた。

グラン・カピュサン（3,838メートル）東壁のプティルートは、1997年にアルノー・プティとステファニー・ボデ、パスカル・ゴーダン、ジャン＝ポール・プティが拓いたもので、2005年にアレクサンダー・フーバーによってフリー化され（450メートル、8b）、モン・ブラン山群屈指のマルチピッチ・フリールートとなった。2010年にはダーフィット・ラマがフリー第２登を果たしている。

７月初め、フランス女性カロリーヌ・シャバルディーニとオーストリアのミッヒ・ケメターが相次いでレッドポイントした。重要なボルトが数か所撤去されてから初めての成功である。ケメターは、同じオーストリアのコディ・シムスとワンデイ・アッセントを狙って７月４日に取付いたが、２人とも核心部のレッドポイントに失敗、いったん下降した。その後数日間雪と雨が続き、再挑戦は７日にずれ込んだ。

この間、シャバルディーニが女性初のレッドポイントを狙って、ひと足早く６日に取付いた。夫のジェームズ・ピアソンをビレイヤーとし、フランス人ガイド、マリオン・ポワトヴァンのサポートを受けて、３分の２の高さにあるボナッティレッジでビバーク後、翌日頂上まで抜けた。

ケメターとコディはカピュサンの基部でビバークし、７日朝５時に取付いた。ケメターが核心の8bピッチを２回目で、その他はすべて１回目で登ってレッジで休み、上部ピッチへ心の準備をととのえた。ここから先は初めて手を触れる区間だったからだ。ケメターは8aピッチを２回目で登った以外はすべてオンサイト、午後10時半、シャバルディーニから数時間遅れて頂上に立った。

３．アイガー北壁

アイガー・ダイレクト50周年の2015年夏に新たな最難ルート、アイガー・オデッセー（8a+）を拓き、パシエンシア（8a）もレッドポイントしたロジェ・シェーリ（スイス）が８月、ラ・ビダ・エス・シルバル（7c）をフリー第２登した。彼はこれで、アイガー北壁のフリー難度ベストスリーをすべて登ったことになる。

トム・バラードは11月も終わるころアイガーに戻ってきた。ポーランドもマルチン・トマシェフスキと組んで北ピラーを狙い、1970年スコットランド・ルート「知恵の七柱」の右にタイタニック（1,800メートル、6b、A3、M5）を拓いたのである。ポータレッジで８回のビバークを要した。

【カナダ北極圏とアラスカ】

１．バフィン島

ドイツのロベルト・ヤスパーとシュテファン・グロヴァッツはカメラマンのクラウス・フェングラーを伴って５月31日にクライドリバーを出発、氷結し

たフィヨルド上170キロのアプローチをこなし、サムフォード・フィヨルドのビッグウォールを目ざした。バフィン島東岸のアプローチは、春には凍結したフィヨルド上をスノーモービルで、氷が解けるとボートを使うのが一般的だが、いずれもイヌイットの助けを借りなければならない。今回の３人はスキーを履いて１か月分の物資を積んだソリを曳き、あくまで自力でのアプローチにこだわった。

目標は、高さ800メートルに及ぶタレット・ピーク西壁だったが、いざ登り出してみると古いピトンやボルトが途中に残されていた。ヤスパーとグロヴァッツが交互にリードし、フェングラーが撮影しながら新たなフリー・バリエーションをまじえて登る。半分の高さまで行ったところでグロヴァッツが手に落石を受けた後はヤスパーがリードし、６月14日午後２時30分頂上に出た。上部の凍ったピッチでA1のエイドを使った以外はすべてフリー（最高7ｂ+）。帰国後に調べてみると、このルートは1995年にウォーレン・ホリンガー、ジェリー・ゴア、マーク・シノットが登ったNuvualik（5.13、A3）であることが分かった。

帰路はすでに季節が進み、フィヨルドの氷が解けはじめていた。氷の上に10センチもたまった冷たい水を漕いでフィヨルドを渡り、後半は陸路をたどってクライドリバーに帰ったのは６月28日のことだった。ヤスパーとグロヴァッツは、2008年にTake a long Way Home（700メートル、X-、A4）を登った後に同様の方法で帰還している。

ベルギーのニコラ・ファヴレスとセアン・ヴィラヌーヴァがイタリアのマッテオ・デッラ・ボルデッラ、マッテオ・デ・ザヤコモ、ルカ・スキエーラと組んでグレートセイル・ピーク（1,615メートル）に1,000メートル級の新ルートを拓いた。

一行はクライドリバーからソリを曳いて６日間進み、６月22日、スチュワート峡谷にBCを設けた。ウォームアップとしてウォーカー・シタデルの新ルートを登ってからグレートセイル・ピークのフリー初登に向かった。ヘッドウォールを7ピッチ行くと2002年にロシア隊が登ったRubicon（Ⅵ、A4）に合流、そこから８ピッチで頂上に出た。所要７日間。その後５人は二手に分かれ、みごとに切れ込んだクラックを持つダイヒードラルをそれぞれ目ざした。ベルギー・ペアは終了点の100メートル手前で嵐につかまって８時間ビバーク、翌日プロテクションの取れない30メートルのスラブを越えてルートを完成した。イタリア・トリオは悪天候にもめげず登り続け、BCから24時間で頂上を往復した。

２．アラスカ山脈

アメリカのコリン・ヘイリー（26）が６月１日にフォラカー（スルタナ、5,304メートル）南壁インフィニット・スパーをレコードタイムで単独初登攀した。敢行する数日前にロブ・スミスと組んでスパーを登ってから、12時間29分でソロしたもの。２人は５月２日カヒルトナ氷河に飛び、デナリのウェスト・バットレスを登り、フォラカーのスルタナ・リッジで高所順応を済ませ、下降路を偵察した。取付いたのは５月27日、18時間20分で完登した。好天に加え、ルートの前半部にイギリス・チームの足跡があったことも味方した。

カヒルトナ・ベースに戻ってスミスの下山を見送ったヘイリーは、２日足らず休養しただけで。５月31日に再び南壁へ向かった。明けて６月１日、午前４時前にベルクシュルントを越えて取付く。極端に切り詰めた荷物でスピードを上げ、核心のナイフエッジの稜線を午前中に通過、ベルクシュルントから12時間29分で頂上を踏んだ。しかし、スルタナ・リッジの上部を過ぎたころから降雪に見舞われ、視界の

失われたなか48時間にわたって下降路を求めて彷徨。スムーズに行った登攀とは対照的な苦労を強いられた。

【ヨセミテ渓谷】

フリー・クライミングで次々に限界を伸ばしてきたアダム・オンドラ（チェコ）が、2014年にフリー化されたドーン・ウォールの第２登をやってのけた。エル・キャピタンはおろかヨセミテさえ初めてのオンドラは10月から挑戦を開始。途中までロープをフィックスして5.14+の核心を中心にリハーサルした。ムーブの目途を付けて11月４日にいったん頂上まで抜け、そこから垂らしたロープを使って全32ピッチのムーブを再確認した。ワンプッシュの攻撃には11月14日に踏み切り、途中２日間の休養をはさんだ８日間でレッドポイントに成功した。

【ペルー・アンデス】

フランスのマクシム・ボニオとディディエ・ジュルダンが８月にワイワッシュ山群のシウラ・グランデ（6,344メートル）東壁を初登攀、ルート名をLe Bruit des Glacons’（1400メートル、ED、6c、WI 5）とした。1936年にエルヴィン・シュナイダーらが登ったこの山は、85年にジョー・シンプソンとサイモン・イェーツ（イギリス）が西壁を初登攀した帰路に遭難、別れわかれなった末に奇跡的に生還した出来事で有名になった。まさにエピックと呼ぶべき事件の顛末は単行本（Touching the Void）になり、映画も作られて世の注目を集めた。

ラグナ・シウラにBCを置いた今回の２人は、最初の攻撃が天候悪化に妨げられた後、８月24日に改めて攻撃した。東壁を支える巨大なピラーを２回のビバークで登りきり、ピラーの頭（5,700メートル）に到達、100メートル懸垂下降して南東稜に飛び出した。数日のうちに悪天候になるという予報に接していたのでそのまま続行、傾斜70度、750メートルのリッジを進んで夜の11時、6,200メートル移転で３度目のビバークをした。翌27日の朝８時、２人は頂上に達し、ベルクシュルントまでの1,400メートルをもう１回のビバークで無事切り抜けた。

フランスのアルノー・バヨル、アントワーヌ・ブルトン、シリル・デュシェーヌ、ディミトリー・ヌニョスがプスカントゥルパ東峰（5,442メートル）北壁の新ルートを登った。フランス陸軍高山会（GMHM）所属の４人は８月15日、セルアコチャにBC（4,800メートル）を置き、2012年オランダ隊が登ったルート（Pico Loco）をトレースするつもりだった。しかし、観察の結果、北壁のダイレクトな新ルート（400メートル）をやってみることにし、８月18日から28日の11日間で完登した。頂上に達したのは26日だったが、フリーで登れなかった２ピッチは次の２日間でやり直し、El Juego Sumando（7b）とした。

【パタゴニア】

近年になく好天に恵まれた2015/16シーズンは、アメリカ人を主体に有力クライマーがあいついで訪れ、フィッツロイとセロ・トーレを中心に大小の新ルートが登られたほか、マイナーピークの初登頂も記録されるなど活気あるシーズンだった。
南氷陸の奥に位置するリソ・パトロンでは、国際チームが中央峰東壁を初登攀。チリ側のパイネ中央岩塔では女性チームがフリー・バリエーションを拓くなど、ひさびさに実り多いシーズンとなった。以下、国名表記のないのはすべてアメリカ人である。

１．セロ・トーレ縦走と南東稜

１月31日、コリン・ヘイリーとアレックス・オノルド（米）がトーレ・トラバース（シュタンハルト

2,730メートルからセロ・トーレ3,102メートルまで）の第２登を20時間40分で成し遂げた。２人は前年もこのルートのワンデイ・アッセントを試み、20時間でトーレの肩まで行ったところで悪天候に見舞われ断念していたが、今回は余裕をもって成功した。ちなみに、トーレ・トラバースの起点はシュタンハルト北のコル、ゴールはもちろんトーレ頂上である。なおヘイリーは2008年に、アルゼンチンのローランド・ガリボッティと組んで初縦走に成功。昨年度はトーレからシュタンハルトへと北上する「逆縦走（熊と仏陀のトラバース）」にも成功している。

1970年にチェザーレ・マエストリがボルトを連打した南東稜はその悪名に反し、残置の恩恵を受けるクライマーの人気ルートとなっていた。ボルトに依拠することなくほんらいの南東稜を取り戻そうとする努力は1999年イタリアのエルマンノ・サルヴァテッラに始まり、2012年にアメリカのヘイドゥン・ケネディとカナダのジェイソン・クルックが初めて成功。下降途中に上部のボルトを切り取ってしまった。この大胆な所業に賛否両論が巻き起こったものの、マエストリのルートは事実上消滅し、南東稜はフェアな手段で登られるルート（7a、A2、WI5）に生まれ変わった。ケネディとクルックのすぐ後にはオーストリアのダーフィット・ラマが第２登（フリー初登、8a）した。

2015/16年シーズンはこの新しい南東稜で第４～６登が記録された。なかでもアンドルー・ロスナー、マイキー・シェーファー、ジョシュ・ウォートンは２月４日～６日、ラマに続くフリー第２登（通算第６登）を果たした。ウォートンはかつて、ボルト撤去に反対するスティーブ・シュナイダーに殴られたことがあるが、ようやく宿願を果たした。第４登は１月30日～31日イタリアのマッテオ・デラ・ボルデッラとシルヴァン・シュープバッハ、第５登は２月４日～５日、スイスのロジェ・シェーリとフリードリヒ・マーデラーである。

セロ・トーレのすぐ北にあるトーレ・エガー（2,850メートル）では二つの重要な登攀が行われた。南東壁には1986年12月にスロヴェニア（当時ユーゴスラヴィア）のフランチェク・クネズ、シルヴォ・カロ、ヤネズ・イェグリッチが登ったサイコ・ヴァーティカル（950メートル、Ⅶ、A3）があり、途中まで固定ロープを使って登られた。

その後約30年再登は出なかったが１月７日～９日、イタリアのコッラード・ペシェ、オーストリアのローラント・シュトリーミッツァー、アルゼンチンのトミー・アグージョらがアルパイン・スタイルで第２登した。３人が前日ノルエゴス・ビバークに着くと、アルゼンチンのイニャキ・クッシラートとカルリトス・モリーナに出会った。翌日、別個に登りはじめたが待機に時間がかかるため合流、リードした者が垂らしたロープを他の４人が後続するやり方に変えた。狭いレッジでビバークした翌８日の夜頂上に立ち、そこでもう１泊してからトーレとのコルへ下降した。グレードは5.10b、A3、M8。80年代に固定ロープで登られたルートにはまだまだ挑戦に値するものがある。

コリン・ヘイリーは１月19日、エガーの単独初登頂に成功した。ルートはシュタンハルトとのコルからプンタ・ヘロンを越えていくもので、トーレ縦走のおりにすでになじみがあったが、いずれのピークも単独で登られたのは初めてである。

カナダのマルク＝アンドレ・ルクレールはシュタンハルトの単独第２登に成功した。東壁のトマホークからエグゾセをたどったもので、全行程初めてのフリーソロ。ルクレールは、セロ・トーレ南東稜から西壁へ回り込むコークスクリューも単独登攀している。彼は冬季明けの９月から入山し、エル・モチョ

やメディアルナ、セロ・ポローネでも大小のソロを行った。

１月18日、イギリスのマット・バーデキンとトム・リプリーはアグハ・ビフィーダ南峰の東壁に新ルートを拓いて〈セイレン〉（500m、5+）と呼んだ。取付から15ピッチ登ってコーガン（1993年）に合流。ビバークのあと残る９ピッチを登って南稜に出た。ビフィーダ南峰はこの双耳峰の低いほうの頂で、めったに登られたことがない。今回が通算第３登にあたる。

２．フィッツロイ山群

フィッツロイ（3,405メートル）ではヘイリーが2015年12月31日、南西稜のカリフォルニア・ルートを単独で登った。彼は以前スーパー・カナレータ（スーパー・クーロワール）を単独登攀しており、これが２回目。フィッツロイを２回ソロしたのは故ディーン・ポッターに続いて２人目である。ピート・ファソルトとジョナサン・シャッファーが１月20日、北壁にプリティ・バード（1,000メートル、7a+ R/X、A0）を拓いた。スーパー・カナレータの左手に広がるフェースをたどるラインで、北西壁のアファナシエフ・ルート（1995年）と数ピッチを共有して中間部のレッジ、グラン・オテルに達してから、ヘッドウォールのワイドクラック・システムを登るもの。この区間のオフウィズス・ピッチがルートの核心で、すべてファソルトがリードした。スクイズチムニーのピッチでは、プロテクションを取らずにリードしたという。ビバークは登りと下りに１回ずつ、グラン・オテルで行なわれた。ルート名は、ファソルトのビレイ中に飛来したハチドリに由来するという。

マックス・バールリン、クイン・ブレット、マイケル・ルーケンズは１月21日、南壁ワシントン・ルート（2011年）の右手をたどり、コロラド・ルート（500m、7a）とした。マーク・ウェストマンとベン・アードマンが第２登し、質の高いことを追認した。この２人はアグハ・デスモチャダのサーカス・ペッツ（2011年）も第２登している。

スロヴァキアのミハル・サボフチクとヤン・スモレニも１月30日～31日、南壁に新ルートを拓いた。アサド（700m、7a+、C2、M8）と名付けられたこのルートは、カナディアン・ルート（2005年）の左手を13ピッチたどってからこれに合流するもの。出だしの氷化した４ピッチをドライツーリングで突破し、あとはクリーンエイドとフリーをまじえてボリス・シモンチッチのラインをたどって終了した。８ピッチ目を終えた地点でビバークして頂上に立ち、そこでもう１回ビバークした。

フィッツロイ頂上から南西に延びる支稜には二つの岩塔が連なっている。これを末端のアグハ・デスモチャダからアグハ・デ・ラ・シージャを越えて南西稜へと継続するのがウェーブ・イフェクトで、2011年にウィット・マグロとネイト・オプ、ジョシュ・ウォートンによって拓かれた。1,900メートルのスケールを誇る長大なラインで、これを１日で完登した者はいなかった。

トーレ・トラバースを21時間以内で成功させたヘイリーとアレックス・オノルドは、次の目標をこのルートのワンデイ・アッセントに決めた。２月６日、デスモチャダ基部をスタートしてゴールデン・イーグルを登り、ラ・シージャのイル・バスタルドをフリー初登攀、カリフォルニア・ルートをたどり、17時間でフィッツロイ頂上に抜けた。バリエーションをまじえたのでルート名はウェーブ・イフェクト・ダイレクト（6ｃ）とした。

２月６日、スコット・コルディロンとジェス・ロスケリー、ベン・アードマンはラ・シージャから南西稜へと継続した。東面ではなく西面からアプロー

チしたため、アグハ・ポワンスノ西壁ガリーのセラックを克服しなければならなかった。

同じ日、アルゼンチンのホルヘ・アッカーマンとカナダのトミー・マクレーンは東壁のエル・コラソン（1,250メートル、６ｃ）を１日で登った。午前５時に登りはじめ、20時間半で頂上に着いた。1992年にオホスナーとピテルカが拓いたルートで、名前の由来となったハート型の凹み部分は振り子トラバースで迂回している。

また、イタリアのマッテオ・デラ・ボルデッラとダヴィド・バッチは東ピラーの1976年フェラーリ・ルート（1,200メートル、６ａ、A3）を３日間かけて第２登した。

横山勝丘と長門敬明はマルコーニ南氷河で二つの新ルートをフリーで登った。１月18日～19日、ポローネ・グループのトリデンテ西壁（300メートル）を登って、ノブマニア（5.12d）と命名。30日～31日にはピエル・ジョルジョ（約2,700メートル）北西壁のピラー（500メートル）に取付いた。ルートは半分以上がオフウィズスで、ヘッドウォールの100メートルはかぶっていた。稜線に抜けたのは２日目の夕方だった。ルート名はピラー・カニーノ（5.12b）。